

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第二十六卷「人文科学（二の六）」

心理、精神、身体、生命および倫理、  
道徳、人間学（六）  
人格、人間性、犯罪心理

編纂、監修

岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第二十六巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、人格、人間性、犯罪心理に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

第一部 現代日本人の心理の例（二〇〇五）

第二部 人格（パーソナリティ）障害

第一章 精神医学的定義

第二章 精神医学的定義の概要

第三章 罹患者との個人的交流

第四章 「岩崎式日本語」にまつわる個人的交流

第三部 現代日本人の心理の例（二〇〇八）

第三編 三十歳～三十九歳

第一部 ISIS（イスラム国）の斬首・焼殺動画とバイユ的エ

ロティシズム

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの

第九編 著作権者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳〜二十九歳

第一部 現代日本人の心理の例（二〇〇五）

二〇〇六年一月十七日 起筆

二〇〇六年二月十八日 公開

二〇一七年三月十三日 最終更新

特設サイト「精神病理学・精神疾患研究」

交流させていただいた方々の文章です。皆様のサイトにて公開されている場合、そのアドレスにリンクさせていただきました。

●今までの交流の概要

●当サイトにおける精神疾患患者等の個人情報扱い、およびDV・暴力・虐待等の加害者への対策について

●現代日本人の心理の例（目次・凡例）

●精神疾患関連リンク

◆個人交流会や訪問・見学先（精神病棟、心身障害者専用施設、DV・暴力被害者専用ハウス・シェルターなど）で交流してきた方々の言葉・文章を載せています。「同じような悩みを抱えている方々の

力になりたい」という思いから公開を希望して下さいました。

◆交流者数はほぼ男女同数ですが、個人的に、ご自身の症状や苦悩を自ら言葉にしにくい発達障害・知的障害・言語障害やひきこもり・ニートの男性と、それらを自ら言葉にでき人に聞いてもらいたいという希望・欲求の強い不安障害・摂食障害・解離性障害・パーソナリティ障害の女性との交流が多いので、ここに掲載している言葉・文章も必然的に女性のもが多くなっています。

男性の言葉・文章も掲載していければと思っています。

▼私にご相談を受けて交流してきた、精神・身体症状や共感覚、その他の特殊知覚・症状を持つ女性の皆様に、私のサイト内の女性専用スペースの管理・運営をしていただいております。また、これらの女性の皆様が入居者の多くを占める、シェアハウス型の女性寮に協力させていただいております。

女性に特有の症状・知覚については、女性スタッフおよび寮生に解説をお願いしています。

← ●「精神・身体症状、共感覚、その他の特殊知覚・症状の解説の分担などについて」を参照。

岩崎純一のウェブサイトを 女性専用スペース

岩崎純一のウェブサイト  
女性専用スペース  
Women Only

●二十五歳女性（二〇〇五）

（1）Histrionic personality disorder ICD-10 F60.4 演技性人格障害

Avoidant personality disorder ICD-10 F60.6 回避性人格障害

（2）共感覚及び女兒退行にすぎない。人格障害を診断するなら、スキゾイド型（統合失調質）人格障害でなければおかし。

（3）同僚や知人とワイワイ話するのが好きで社交的な夫を愛せず、芸術や絵本に出てくる子どもの世界に憧れるようになり、家にいるようになった。

私が私という言葉で言っている私とは、主人がいつも外の世界でしているような、自己主張ができたり、人とスムーズに話したりするような自由自在な自分・自己自身のことではなくて、もっと他人と区別がないような、区別がなくても私が困らないような、区別しなくても他人もだれも困らないような、自分⇄他人という私のことです。

だから、私の中では外に出て自己主張するのは私ではないです。むしろ、自己主張しなくても、私のこの共感覚が発動して、あの虫ががんばって青色のイ長調の人生（虫生？）を生きているのが私にわかったり、周りの友達には見えない色んな色や音や香りが私に見えるということがわかっていて私それ自身が、私にとっての自分自身です。

第二部 人格（パーソナリティ）障害

二〇〇六年一月十七日 起筆

二〇〇六年二月十八日 公開

二〇一七年九月十一日 最終更新

特設サイト「精神病理学・精神疾患研究」

第一章 精神医学的定義

ICD-10 : F60 特定の人格障害 (Specific personality disorders)

ICD-10 : F61 混合性及びその他の人格障害 (Mixed and other personality disorders)

ICD-10 : F62 持続的人格変化、脳損傷及び脳疾患によらな  
るもの (Enduring personality changes, not attributable to brain  
damage and disease)

ICD-10 : F63 習慣及び衝動の障害 (Habit and impulse disorders)

DSM-IV-TR : 16 人格障害 (Personality Disorders)  
DiseasesDB 9889, MedlinePlus 000939, MeSH D010554 : 人  
格 (パーソナリティー) 障害 (Personality Disorders)

## 第二章 精神医学的定義の概要

人格障害は、従来の境界例 (ボーダーライン・ケース) や精神病  
質 (サイコパシー) を引き継ぐ概念で、精神病・精神障害・神経症  
性障害のいずれでもないが、偏った行動や思考によって本人が苦悩  
したり周囲の人間が巻き込まれたりしている状態を言う。多く女性  
で占められる。

正式な訳語は「パーソナリティー障害」に統一されたが、「人格障

害」の語を用いる医師も多く存在する。単に語感の違いによる使い  
分けで、異なる概念ではない。

人格障害は、妄想性、統合失調症質、統合失調症型、反社会性、  
境界性、演技性、自己愛性、衝動型、不安性 (回避性)、依存性、強  
迫性などに分けられるが、従来の境界例はこれらの多くを含むもの  
であって、境界性人格障害のみを指すのではない。

ただし、サイコパシーについては、このうち反社会性人格障害、  
衝動型人格障害を主に指し、ほぼ男性のみで占められる人格障害で  
あり、さらに、日本の法学概念としては人格障害ではなく精神障害  
である。(精神保健及び精神障害者福祉に関する法律)

DSM-IV-TR においては、人格障害をクラスターA (奇異群・odd  
type)、クラスターB (劇的群・dramatic type)、クラスターC (不  
安群・anxious type) の三カテゴリーに分類しており、Aには妄想性、  
統合失調症質、統合失調症型、Bには反社会性、境界性、演技性、  
自己愛性、Cには回避性、依存性、強迫性と特定不能の人格障害が  
含まれる。

クラスターAは、精神病である統合失調症や妄想性障害とまでは  
いかないがそれらに近縁の症状を呈する人格障害であり、クラスター  
Cは、不安障害や恐怖症や強迫性障害と密接に関連があることか  
ら、最もよくDSM-IV-TRの「人格障害」の概念を表明しているの  
は、クラスターBであると言える。

一般の若者の間では、境界例全般的に境界性人格障害とその近  
縁の性格・人格の様態が、俗称として「ボーダー」、「境界」などと

呼ばれることがあり、DSM-IV-TRにおいて臨床上一つそう合理的な分類が成される以前には、日本の学校現場においても流行語のようになった。「私はボーダーなので、自分勝手です」などのように日常会話で使用されるが、精神病理学的には適切な言い方とは限らない。この場合は単に、「変わり者」や「何か悪いことをしそうな人」の意味で用いられているにすぎない。ただし、この使い方の全てが誤っているわけではなく、医師の診断においても、「ボーダーらしき状態」としか判断できないケースも少なくない。

そもそも、人格障害者が「変わった性格の人」や「個性豊かな人」とは言えず、「人格の障害を持つ人」として問題にされている理由は、彼らがしばしば、情緒不安定、うつ症状、不登校、摂食障害、リストカット、脅迫、恐喝、暴力、殺人など、家族や周囲の人々を巻き込む事態や犯罪を起こすことが多いからであり、かつ、多くの場合そのことに自ら気付いたり苦悩したりしている点で、従来の「精神病」者ではないこともまた明白だからである。

その意味で、人格障害は、個々人の性格の問題でもあると同時に、社会状況、文化、家庭環境を要因として生じる側面も大きいと言える。

DSM-III-R以前には付録などに掲載されていたものの、DSM-IVやDSM-IV-TRからは除外された人格障害には、サディスティックパーソナリティー障害、自己敗北性パーソナリティー障害（マゾヒスティックパーソナリティー障害）、抑うつ性パーソナリティー障害、受動攻撃性パーソナリティー障害の四つがあり、学説の不統一や不

和、人権団体からの反対などの多くの事情により、概念の継承や診断分類の正式な創設が断念されている。とりわけ、フェミニスト団体・女性人権団体からの反発は厳しく、これらのパーソナリティー障害概念そのものが女性蔑視であるといった主張が展開された。

#### 【参考】

◆ 解離性障害

◆ 性関連障害

### 第三章 罹患者との個人的交流

解離性障害、気分障害、不安障害の方々に比べれば、人格障害の方々との交流は少ない。あるいは、少ないというよりは、長続きすることが少ないと言ったほうがよいかもしれない。長期に渡る人間関係を嫌がったり、約束事を守れなかったりすることも、一部の人格障害者の特徴であると言えそうだ。

しかし、人格障害の方々は、自分ではどうしようもないという悩み苦しみを抱えていらっしやるのであり、本人の責任だけではない部分もあると思うのである。それは、摂食障害や性関連障害の項で書いた私の見解とほぼ同じである。

すなわち、成長の過程で、「最低限、家族にだけは自分を認められたい」という、全くわがままと言えない、人として当然のささやか

な希望が、まず打ち砕かれているケースがあまりに多すぎるのである。そこが最初から崩れているので、第三者である医師や友人やパートナーが何をどう言っても、「認められた気がしない」という反応になる。

そうになると、第三者が介入する余地のない家族・家庭の問題であるし、実は、統合失調症などの「患者個人の」精神障害よりも「治りにくい」、長期的で重大な「複数人の」集団的性格障害であるときえ言えると、私は思う。母娘そろって境界性人格障害である場合、実際にはICD-10の「F24 感応性妄想性障害」の低位に定義される「二人組精神病」である場合も多いと感じられる。

むしろ私が関心があるのは、何度でも書くが、特に家庭の問題もなく、ごく「普通に」育った心温かく礼節ある人が、何の前触れもなくいじめに遭ったり、事故や災害に遭ったり、人の死に接したり、性的暴行を受けたりした際に陥った、解離性障害や気分障害や不安障害や人格障害なのである。

この観点から言えば、かなりの性的暴行を受けていながら、解離性知覚麻痺や解離性同一性障害に陥らず、人格障害にとどまるような女性は、相当の精神力の持ち主であると考えられるのである。むしろ解離性障害に陥るのが「普通」だからである。

▼ 私をご相談を受けて交流してきた、精神・身体症状や共感覚、その他の特殊知覚・症状を持つ女性の皆様に、私のサイト内の女性専用スペースの管理・運営をしていただいております。また、これ

らの女性の皆様が入居者の多くを占める、シェアハウス型の女性寮に協力させていただいております。

女性に特有の症状・知覚については、女性スタッフおよび寮生に解説をお願いします。

← ● 「精神・身体症状、共感覚、その他の特殊知覚・症状の解説の分担などについて」を参照。

岩崎純一のウェブサイト 女性専用スペース

岩崎純一のウェブサイト  
女性専用スペース  
Women Only

妄想性人格障害、演技性人格障害、回避性人格障害の女性に、岩崎式日本語の使用者がいらっしやる。

参考文献（精神疾患研究のトップページに挙げた文献以外）

Hickey, Philip. (2010-05-05) Personality Disorders Are Not Illnesses. Behaviorismandmentalhealth.com. Retrieved on 2013-04-16.

Widiger, Thomas (2012). The Oxford Handbook of Personality Disorders. Oxford University Press.

『臨床心理学』「パーソナリティ障害」 Vol.9 No.4 金剛出版、二〇〇九

『境界性パーソナリティ障害―疾患の全体像と精神療法の基礎知識』小羽俊士、みすず書房、二〇〇九年一月

### 第三部 現代日本人の心理の例（二〇〇八）

二〇〇九年二月二十一日 起筆

二〇〇九年二月二十六日 公開

二〇一七年九月十一日 最終更新

特設サイト「精神病理学・精神疾患研究」

交流させていただいた方々の文章です。皆様のサイトにて公開されている場合、そのアドレスにリンクさせていただきました。

●今までの交流の概要

●当サイトにおける精神疾患者等の個人情報扱い、およびDV・

暴力・虐待等の加害者への対策について

●現代日本人の心理の例（目次・凡例）

●精神疾患関連リンク

◆個人交流会や訪問・見学先（精神病棟、心身障害者専用施設、DV・暴力被害者専用ハウス・シェルターなど）で交流してきた方々の言葉・文章を載せています。「同じような悩みを抱えている方々の力になりたい」という思いから公開を希望して下さいました。

◆交流者数はほぼ男女同数ですが、個人的に、ご自身の症状や苦悩を自ら言葉にしにくい発達障害・知的障害・言語障害やひきこもり・ニートの男性と、それらを自ら言葉にでき人に聞いてもらいたいという希望・欲求の強い不安障害・摂食障害・解離性障害・パーソナリティ障害の女性との交流が多いので、ここに掲載している言葉・文章も必然的に女性のもが多くなっています。

男性の言葉・文章も掲載していければと思っています。



岩崎純一のウェブサイト  
女性専用スペース  
Women Only

▼ 私をご相談を受けて交流してきた、精神・身体症状や共感覚、その他の特殊知覚・症状を持つ女性の皆様に、私のサイト内の女性専用スペースの管理・運営をしていただいております。また、これらの女性の皆様が入居者の多くを占める、シェアハウス型の女性寮に協力させていただいております。

女性に特有の症状・知覚については、女性スタッフおよび寮生に解説をお願いしています。

← ● 精神・身体症状、共感覚、その他の特殊知覚・症状の解説の分担などについて

岩崎純一のウェブサイト 女性専用スペース

● 二十一歳女性（二〇〇八）

(1) Paranoid personality disorder ICD-10 F60.0 妄想性人格障害

(2) パラノイア・妄執だが、人格の障害ではない。

(3) 未婚の両親に捨てられた（両親とも直後にそれぞれの家庭を形成）ことによる苦悩。以下のような妄想小説を書き殴るのが好きである。

私の理想郷物語

六月二十二日

私はついにあきらめたよ。自分が自分でいることをあきらめたのではない。周りの人間に自分の能力や生き方を語ることをあきらめた。今の日本では自分の居場所はないという結論に達したから。私は木の小舟を一艘買った。そして、この日、一日分の食糧の入った袋だけを持って、伊豆半島の海岸からその舟に乗って出た。櫂も持たず、ただ揺られた。途中で運よく伊豆諸島のどこかに流れ着いたら、そこでのんびり暮らそうかと考えてた。私にとっては、人生とはそういうもの。一番の知性を持つ自分とは、田畑を耕しながら大好きな人と子どもと一緒にのんびりと暮らす自分と、表裏一体のもの。私はそういう人生を探しに旅に出た。もしどこにも辿り着かなくても、自分の死んだ体が浮くことになる海水だけは、自分をわか

ってくれるわ、そう思った。

舟は伊豆諸島のどの島にも流れ着かなかった。そのまま太平洋の青一色に囲まれて、どこまでも進んでいった。

六月二十三日

私は、持っていた食糧を全て食べ終えた。あとは、海の流れの気まぐれに命を任せるばかり。

六月二十四日

私は、舟の上で誕生日を迎えた。二十一歳になった。そのまま二日間舟に揺られた。

六月二十六日

私はふと目を上げた。霧の向こうにかすかに島が見えてきた。なんだ、伊豆諸島を通り過ぎてなかったのね、またこれも現代の人間の手の入った多くの島のうちの一つにすぎないわ、などと思ひ、舟が自然に流れ着くのを嫌な気分で待った。それは爽快なあきらめでもあった。

舟は島の砂浜に辿り着いた。私は舟を降りて歩き出した。砂浜のどの方角を見ても、すぐに森に続いているばかりで、通れそうな小道さえなかったから、思い切つて一箇所から森に入った。草木を掻き分けながら、土を踏みしめて山を登っていった。鬱蒼と茂る木々を三十分ほど進んで、山を下りると、ひらけたところに出た。する

と、まだ五、六歳くらいの三人の女の子たちに出会った。私から話しかけた。

「こんにちは。ヨシコと言います」

一番前の子がいぶかしげに答えた。

「こんにちは。チナって言います」

「この島に住んでるの？」

「うん、住んでるの」

「そう。私は旅をしてるのよ。少し前に舟で辿り着いて、この山の向こうから来たの。歩いて越えてきたのよ」

「歩いたの？ それでもうここに着いたの？ 早いね」

少女はすぐに警戒心を解いた。

「お姉ちゃんはチナちゃんよりずっと体が丈夫だから、大丈夫よ。」

チナちゃんだったら、大変だけどね」

「うん。それよりね、今大変なの。ほかのお友だちが熱出して寝てるの。私たち、助けられる人を探してたの。お姉ちゃん、変な人じゃなさそうだから、助けて」

「うん、いいわよ。連れてってよ」

私は女の子たちに連れられて、十分ほど小走りに走った。すると、地面の土の上に、はあはあと言いながら寝ている五歳くらいの女の子が一人いた。周りには、看病している女の子も五人いた。

「今このお姉ちゃんがいたから、呼んできたの」

「こんにちは。助けてくれませんか」

女の子たちは口々に言った。私はその場に深くしゃがみ、寝てい

る子の首と体を持ち上げて抱きかかえた。そして、女の子たちが持っていたコップを受け取って、中に入っていた水を飲ませた。女の子は少し元気になった。私はチナに尋ねた。

「この水はどこから持ってきたの？」

「近くの川」

「川の水？」

「うん。私たち、いつも川の水飲んだり木の実を食べたりして暮らしているの」

「えっ。どうして？ おうちに帰ってお父さん、お母さんと御飯食べないの？」

「だって、きっとこの島には私たちしかいないの。私たち九人と、あと二人、今食べ物を探しに行ってくれてるお姉ちゃんたち」

「それだけなの？」

「うん。おととい島に辿り着いてから、みんなで二日かけて、お姉ちゃんの越えたのよりも低い山を越えてきたけど、ほかに誰にも出会わなかったの」

「そうなのね。家の一軒でもあればいいのにね。お姉ちゃんたちはいつ戻ってくるの？」

「もうすぐ」

「じゃあ、もう少し待ってましょ」

私は、熱の出た子を抱いて看病しながら、「お姉ちゃん」なる二人の帰りを待った。でも、夕方になっても二人が戻る様子はなかった。

「おかしいね。まだかしら」

「お姉ちゃん。ぐすん」

何人かの女の子たちは泣き出した。私は一人で女の子たちを慰めていった。一人、また一人と土の上に横たわって眠り始めた。私は徹夜で女の子たちを見守った。

六月二十七日

早朝、重そうな袋を抱えた女の子が、息を切らしながら戻ってきた。女の子は私を少し見たあと、寝ている女の子たちを見回して、もう一度私を見た。

「はじめまして。ヨシコと言います。この子たちから、お姉ちゃん二人が食べ物を探って戻ってくるって聞いたんだけど、あなたはその一人？」

「は、はい。そうです。フミと申します。十五歳です」

「道に迷ったの？」

「そうです。ごめんなさい。みんな、生きてるの？」

「うん、みんな大丈夫。安心して」

「ああ、よかった……。ありがとうございます」

「この島にフミちゃんたちしかいないって？」

「はい、そうみたいなんです」

私はフミの荷物を受け取って、地面にそっと下ろし、フミを座らせた。そして水の入ったコップを手渡した。

「落ち着いて。大丈夫だから。あなたたちのお父さん、お母さんはどうしたの？」

フミは少し体を震わせながらも、丁寧に答えた。

「私は、覚えているところで言うと、お母さんに捨てられたんです。お父さんは誰か知りません」

「捨てられたの？ どこで？」

「ここじゃないところ。お母さんのお腹の中で、産まれるの楽しみにして、無事に産まれたんですけど、産まれたら急に捨てられました。人間の子どもには、いい子と悪い子がいて、悪い子はゴミなの。私はゴミだって、捨てられました」

「どうして。捨てられて、どうなったの？」

「誰かに拾われて、捨て子ちゃんたちの入る施設に入って中学校まで頑張ったけど、死にたくなくて、何日か前に海に飛び込みました。そこからがとても不思議なんですけど、ウミガメが近づいてきて、私を背中に乗せて、私の体だけを上手に海面から出して進んでくれて、三日前にこの島に辿り着きました。一日そこにいたら、同じようにチナちゃんたちがウミガメや魚の背中に乗ってやって来たんです」

私がフミの話をそこまで聞いたところで、もう一人の女の子が袋を抱えて戻ってきた。私は同じように事情を話した。女の子はトキコという名で、十七歳だった。

「私も道に迷って、昨夜はあきらめて、山の中で寝ました」

「そうなのね。元気でよかった」

「私も、両親に捨てられて、誰かに拾われて施設に入って育ちましたが、生きるのが嫌になって、何日か前に川に入ってしまったんです。

体が流れ始めたとき、これで死んで幸せになれるわって思ってたなら、いつのまにか魚の背中に乗ってて、二日前にこの島まで来たんです。それで私たちは出会って、お友だちになりました。みんなで木の実を食べたり川の水を飲んだりしています」

「ほかの子たちはどうなの？」

「やっぱり私たちとおんなじみたいなんです。産まれてすぐに捨てられて施設に入ってたけど逃げ出した子だったり、両親からひどく叩かれて家から逃げ出した子だったり。この子たちの話せることだけ聞いてても、私たちは似てるんです。よかったら、ヨシコお姉ちゃんもしばらく私たちと一緒にいてほしいです。私たち、とても不安なんです。ここがどこかわからないから」

「うん、いいわよ。もう、ここでみんなで暮らしましょ。やっぱりここは伊豆諸島なんかじゃないのね。私たちだけの島よ」

私たち十二人は、その場で夜を明かした。

六月二十八日

皆は朝、南西に移動を始めた。私とフミとトキコは、みんなの二日分ほどの食糧の入った袋を持った。幼い子たちも、弱音を吐かずにしっかりとついてきた。

島の西側のひらけた砂浜に出ると、また一艘の舟が打ち上げられているのが見えた。そばには、また女の子が立っていた。十二人は近づいて、全ての事情を話した。女の子の名はヒトミで、十八歳だった。

「実は私も、舟に乗ってきたんです。自分から舟に乗れなくてただ飛び込んでしまった子たちは、ウミガメや魚に見つけられて運ばれたのね。びっくり」

十三人はそのまま、一緒に夜まで砂浜で過ごした。十三人がそれぞれに持ってきた日用品のおかげで、生活上のやりたいことには困らなかった。今の年月日と時刻を示す暦と時計、採集した食べ物を入れる入れ物、体温を調整できるだけの衣服や靴や帽子や寝袋。全員分はそろっていなかったものの、何とか皆で助け合えば、暮らせないことはなかった。

### 第三編 三十歳〜三十九歳

#### 第一部 ISIS（イスラム国）の斬首・焼殺動画とバタイユ的エロティシズム

二〇一五年二月十二日 起筆、擱筆、公開

#### 目次

- 「あなたは ISIS（イスラム国）の惨殺動画を見ましたか？」
- バタイユの『エロスの涙』や映画『カリギュラ』、エログロナンセンスに見るサディズム・マゾヒズムと恍惚の同根性
- 死者の亡霊への恐れおののきから来る責任回避の心理

■ エログロ・SM雑誌を見ながらリストカットをする解離性障害・境界性パーソナリティ障害者の心理

■ エロティシズム・グロテスク様式美のなご ISIS の動画、そして昨今の国内の殺人事件

■ 関連ページ・ブログ記事

■ 画像出典

■ 「あなたは ISIS（イスラム国）の惨殺動画を見ましたか？」

最近、ISIS（イスラム国）による惨殺動画を授業で使う小中学校の教師がおり、問題になっているようである。

その是非についての感想は結末で述べるとして、ともかく、見たくない子供たちはもちろん「見る」と言われる必要などないし、一方で、逆にこの動画がこうして話題になったがために、「見るな」と親から言われて余計に見たくなった子供たち、特に男子たちの間では、映画『カリギュラ』で知られるところのカリギュラ効果が発生し、親に内緒でインターネットの使用などによって動画が閲覧されていることだろう。

時々、ISIS（イスラム国）による斬首動画や焼殺動画を見ていない、あるいは見たくないという人から、「純一さんは見ました？どんな動画でした？」と恐る恐る内容を聞かれることがある。聞いてくるのは、ごく一般の健康な大人である。私だって、もし自分が見

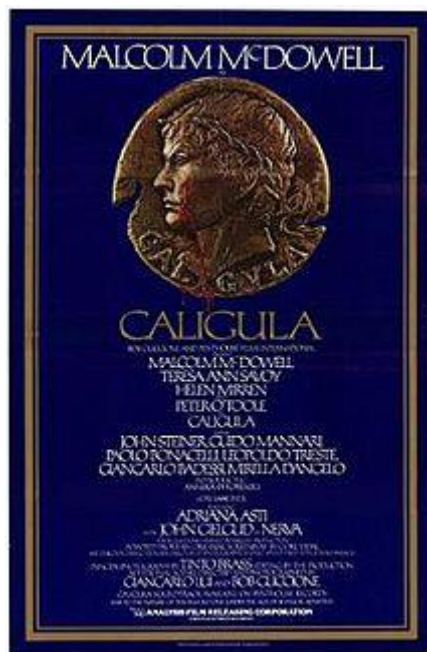
ていなかっただらば、好奇心から人にそう尋ねたかもしれない。

一見すると、いかにも動画を見そうな知人である私に対する、ただの好奇心による他意のない質問に思えるので、いかにもテレビのコメンテーター気取りに「ああ、残忍だよ」などと答えているのだが、あとでよくよくその質問と好奇心を思い返してみると、だんだんと手に汗がにじむことがある。

ここに書くことは、我々日本人の潜在意識、戦後の死生観・霊魂観・美意識の変容や大衆心理といったことと関連するかもしれない。そして私自身も、日常生活の中で他人に対してそのような態度で接している可能性がある。「平和ボケした無血テロリスト」たる日本人の一人ではないかと自省してみるのである。

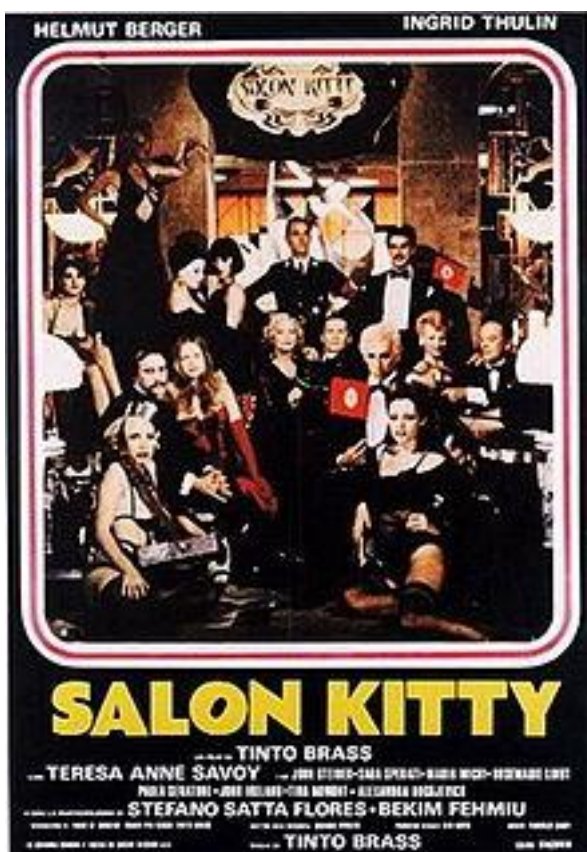
大学のときはニーチェばかり読みあさり、今では、西洋絵画一つを取ってもモローやシャヴァンヌやデルボーやルドンなど陰鬱でグロテスクな唯美主義・象徴主義ばかり追っていたり、DV・性暴力・虐待被害を受けて自殺未遂・リストカットを繰り返す方々と交流し一緒に泣いたり、極めてグロテスク耐性の高い私でさえ、何に身震いするのかをつくづく考えている。

私は、自省のために、もっと言えば内省・内観のために、あるいは、ISISの動画が私自身にとって崇高なエロティシズムが欠落した単なる惨殺動画であることを確認するために、某アラブの反ISISサイトにて、ISISの惨殺動画を見続けていると言える。



■ バタイユの『エロスの涙』や映画『カリギュラ』、エログロナンセンスに見るサディズム・マゾヒズムと恍惚の同根性

ジョルジュ・バタイユは『エロスの涙』の中で、中国に残る公開処刑において、処刑人・見物人たちだけでなく、被処刑人自身が同様に恍惚の表情を浮かべる場合があることを記録している。西洋列強がこれを残酷だとして廃止させようとしたわけだが、もし本当に被処刑人が恍惚を感じていたなら、つまり、この処刑そのものが処刑人・見物人・被処刑人の全員によって創られたある種のスペクタクル・作品であったなら、それは処刑と呼んでよいものではなく、罪人を処罰するという近代精神そのものによる解釈が介在し得ないことになる。



映画『カリギユラ』では、首だけを地面から出した被処刑人たちが巨大な斬首マシンによって処刑されていくシーン、それをカリギユラが笑いながら見るシーン、男女の乱交シーン、裸の女性たちがハチャメチャにはしゃぐレズ・マスターベーションシーンが絡み合う。

映画『サロン・キティ』では、どす黒いハーケンクロイツ（卍の印）のナチスの旗の前に、エログロ全開の女たちがズラッと立ち並ぶ。

こういった悪趣味への憧れは、悪趣味というよりは、古代から現在に至るまで、人間の本能そのものなのだろう。

日本においても、かつてエログロナンセンスが流行したものである。私が生まれる前の話だが。谷崎潤一郎がその嚆矢かもしれないが、『金閣寺』を書いた三島由紀夫に至っては、人体ばかりか「ただの金ピカの」建造物でさえ、絶対美・エログロ・嫉妬の対象なのであった。三島の中では、天照大神（アマテラスオホミカミ）と絶対美とエログロとザドマゾと天皇と自衛隊の全てが、分子の共有結合のように不可分のものであった。世俗の凡人たる大衆とは、世に落ちている「素材」の組み合わせ方・コンテクストが全く違っているのである。元より悪趣味な私としては、三島の「気分」については非常に親近感を覚える。

#### ■死者の亡霊への恐れおのきから来る責任回避の心理

ISISの動画の話に戻る。本来、惨殺動画を見たくないという人は、他人に対しても閲覧体験や内容を（学術目的以外に日常会話で）尋ねない、あるいは動画の内容をできれば知っておきたいという夢想さえも捨てる、均衡のとれた姿勢を貫くべきだとも言えるはずである。

なぜなら、純粹に宗教的・社会的・民俗学的な観点から真摯に覚悟を決めて閲覧した人にとって、すなわち、ISISの思想への共

鳴の結果や犯罪などへの悪用目的で閲覧したわけではない人にとって、その内容は質問者に「見てもらわなければ」即答できるような楽観的なものではないからであり、かつ即答できるような楽観的な内容ではないだろうと質問者が最初から了解しているがために「見たくない」のであろうからである。

ここにおいて、「見たくない」と言いつつ他人に内容を尋ねる行為は、本来は自らが体験すべき（閲覧すべき）心的外傷的・急性ストレス障害的な悲劇体験を他者の身に降りかからせておき、そこから生産された果実（情報）を享受する点において、一般住民や民間人を殺害しつつ自己を正当化する ISIS に潜在意識的にはうつつすらと共鳴的であり、覚悟を決めて動画を閲覧した人と少しの差異もなく原罪的で、抑えがたい残酷性やリビドー・性衝動を表明しているのではないかという視点が立ち上がってきてもよいはずである。

このような我々の好奇心のあり方を「無血テロリズム」と名付けてみるとする。文字通り、血は流さず、傷も残さないのだが・・・しかし、全てを見抜いている被処刑人の亡霊は、このような我々日本人にも取り憑くのではないかという気がしてくる。

数日前から、ISIS がヨルダンのムアズ・カサースベ中尉を焼殺する前に鎮静剤を大量に飲ませていた可能性があるという指摘が、欧米の医学者たちから出ている。もしこれが、「自分たちにもこれだけの慈悲深さがあるのだ、アッラーよ」という、惨殺後に襲ってくるかもしれない「アッラーのたたり」への一抹の不安からくる口実であるならば、例えば、1988年に起きた女子高生コンクリート詰め殺

人事件で、犯人らが女子高生の亡霊を恐れ、女子高生が生前に見たがっていたビデオをわざわざ借りてきて一緒にドラム缶に放り込んだ事例と似ている。

そして、このような「亡霊への恐れおののき」を根底に持つ、「自分では汚く醜いものを見ようとしなが、見た者には好奇心で尋ねたがる性質」は、我々日本人において珍しくないものであると感じる。そもそも、日本のマスメディア、とりわけ新聞とテレビが、戦後の民主主義そのものが、そういう構造をしていると私は思う。

本当は、動画（というよりも、惨殺の手法や光景そのもの）にうつつらと興味があり、自分が動画を見てしまったら、少なくとも心の内ではある種のマスターベーションをしてしまうことに気づいているがために、「死者の亡霊」が取り憑く気がしてあえて見ていない日本人も少なくないのではないだろうか。

これは、「私だけは亡霊の怨みを買うようなことをしていないと思いたい心」、あるいは「死への恐れ」そのものと深く関わっているはずである。

そういえば、東日本大震災が起きてから私は、早急な経済復興ばかりではなく、この荒廃した光景、生命が一挙に頓挫した殺風景を味わう半ば退廃的で鬱病的なエロティシズムこそ重要であり、それは被災者を軽視するどころか弔うことになるという旨のブログ記事を、藤原定家の「見渡せば花もみぢもなかりけり浦の苦屋の秋の夕暮」の歌に仮託して書いたのだった。（下掲の関連ブログ参照）



■エログロ・SM雑誌を見ながらリストカットをする解離性障害・境界性パーソナリティ障害者の心理

サイトの精神疾患のページに掲載はしていないが、かつてサイトの同コンテンツを通じて、エログロ・SM雑誌を見ながらのリストカットがやめられないという解離性障害・境界性パーソナリティ障害の女性の話を聞く機会を得た。

もっともその裏には、児童期の虐待や性暴力、親の愛情不足などが典型的要因としてあるため、話を聞く側も正気ではいられない。

しかし、おかげで『奇譚クラブ』や『風俗奇譚』などのカストリ雑誌の知識を得ることとなった。それにしても、共感覚の公表以来、色々な世界に迷い込んだものだ。だが、これは収穫である。

時々、ある知人の解離性障害者が殺人願望を口にするところがある。「どうして魚は殺していいのに、人は殺しちゃいけないんだろうね。実行はしないけど・・・人を殺す前に、自殺しようと思う」

私はそれを、ブログにも論じた佐世保女子高生殺害事件と比較している。私にとっては、やはりこの女性の殺人発言のほうが、ニーチェ的・バタイユ的均衡、殺しそうでありつつ殺さないところで止まるエロスの均衡を保っており、佐世保事件のほうは、ブログで「発達障害診断批判」の観点から緻密に分析したように、計算高い近代殺人の可能性を多少は残しているように思っている。（下掲の関連ブログ参照）

「自分は死体である」、「藤野一友の描くような女になって切り刻まれたい」などと主張するコタール症候群患者（下掲の関連ページ参照）の女性にも、話を伺ったことがある。

私にとっては、これらの精神疾患者の残酷や、ISISの残酷とは、どこか違っていている。今私は、前者のほうをエロティシズムと名付け、後者をただの国際犯罪と名付けたい。

このほかに私が見たバタイユ的・『エロスの涙』的な恍惚の光景は、ある中規模神社の巫女たちが自分たちの勤めるその神社に内緒で作る和歌の会における、いわば「エログロ・レズ・マスターベーション歌会」だった。このことについては、以前、少しためらい気味に、「女性の集団ヒステリー」という違った角度から憑依障害や転換性障害などの一種と見て、ブログに書いたことがある。（下掲の関連ブログ参照）

このエロティシズムもまた、テレビで見かける一部のタレントの世俗的同性愛とは全く異質の、異性愛の変型であり、世俗から超絶しているように思えた。

厳密には、いわゆる「マスターベーション」と言えるようなものではないが、和歌を詠むにあたり、いちいち自分が月経中か否か、性器の状態がどうか、差し当たり性愛的気分か否かにこだわるので、こちらの頭が痛くなりそうな気分なのであった。しかし私は、嫌悪感どころか親近感を覚えた。あるいは、これに私は嫉妬した。

もっとも、もう少し「小綺麗な」話から言えば、和歌関連の交流のプロセスで、内掌典経験者の女性や旧官幣・国幣社の巫女経験者の

にも出会ってきたし、それはそれで大変に美しく、特に以下に挙げた和歌関連のブログ記事にそのことは書いてきた。これらの世界も、月経中の一挙一動、手指の動作までもが制限され、旧暦で生活するなど、我々の俗なる社会からは半ば信じがたい世界であることを知ったが、私としては、それでも心のどこかで、やはりその文化習俗は戦後日本の現代民主主義社会の悪しき部分に侵されている気がしていた。これらの世界でさえ、性的儀式、エログロ的儀式、サドマゾ的儀式は排除されつつある。

私はそれよりも、戦後日本の現代民主主義社会そのものから超絶し、エログロ側・サドマゾ側にスライドしており、かつ昨今のセクハラや痴漢や児童虐待や殺人事件からも超絶し、それらを無言で見下すほどの崇高なエロスに基づく文化習俗を知りたかったから、上記の体験は、自分自身の共感覚の探究に始まるライフワークにとつての、一つのゴールであった。

ニーチェは、性行為は殺人的であると言った。バタイユも、エロティシズムは有限な個においてしか現れないと言った。エログロ巫女たちのほうの儀式は、有限な個としての自己を真っ正面から受け止める殺人的エロスであった点において、突き抜けた美と言えると考えると私は感じた。

それは、「極端な生き姿」でありながら、一歩間違えばお互いに殺し合いが始まるのではないかと思わせる「ある種の死に姿」でもある点で、ニーチェやバタイユが書き遺したエロティシズムそのものであった。

■エロティシズム・グロテスク様式美のなご ISIS の動画、そして昨今の国内の殺人事件

ISIS の動画を見続ける中で感じたことは、その凄惨さに対する嫌悪感以上に、殺人行為そのものに何の凄惨さも絶対美も退廃も醜さもイスラム教も古代も近代も込めることに成功していないのではないかということだ。

その原因はただ一点で、斬首したジエームズ・フォリー氏や後藤健二氏、焼殺したヨルダンのムアズ・カサースベ中尉との間に何の「エロスの契約」も結んでいないという点に尽きるところ。この殺人動画がグロテスク・スペクタクルでないということは、ある意味では、それを平然と閲覧する姿勢は反テロリズムの姿勢であり、一方で、閲覧者がそこにグロテスクさを見出すことは彼らにとってエロスの成功なのかもしれない。

我らこそが一神教たるイスラム教の権化と主張しているはずの ISIS の一連の殺害行為の最大の原罪的な誤謬は、被処刑人であるジエームズ・フォリー氏や後藤健二氏、カサースベ中尉が恍惚を要求していないにもかかわらず、それを分かって殺害するほどの計算高い知性が実はある点、すなわち殺害者と被殺害者の相互のエロスの要求が不均衡であるという点ではないだろうか。

ISIS の行為、あるいは国内の様々な殺人事件は、殺人・エログロ・

サドマゾそのものの善悪というよりは、執行者と被執行者との阿吽の呼吸の有無、事前の美的要求の均衡の確認の有無によって、断罪されるべきではないだろうか。

言い換えれば、ISISによってあのオレンジ色の服を期せられた被処刑人は、もはや一点の恍惚を『エロスの涙』の被処刑人のように見出す以外に、最期を耐え切るすべがなかった。すなわち、私もサイトの解離性障害のページで解説しているようなストックホルム症候群を被処刑人らが引き起こすこと、ISIS 戦闘員とエロスの同化をおこなうことによってしか、耐えられなかったはずである。ISISの残忍さとは、そのような残忍さとして語られるべきものではないかと私は思っている。

ISIS（イスラム国）による惨殺動画を授業で使う小中学校の教師がおり、問題になっている旨を冒頭に書いたが、これを止めたほうがよいと思う理由も、教師が児童・生徒にエロスの同化の準備時間を与えないからである。

あくまでもここでの視点は、教師（処刑人としての教育者）と児童・生徒（被処刑人としての被教育者）との間にエロスの同化が生じるか否かの確認であって、殺人そのものが善か悪かとか、映像を見るのが子供の精神に悪影響を与えて PTSD や犯罪を誘発するか否かといったことは、全く問題にならない。

全ての教師が、おふぎけで見せたのではなく、大まじめに取り上げたものと思いたいが、いずれにせよ、ほとんどのケースで教育効果と呼べるようなものは見られず、いわば教師のマスターベーション

ンと呼べるような事態として終わるのではないかと思う。こういったことも踏まえて「ISISの動画とエロスについて今後考察したい。ある意味では、先述の質問をしてみたいがちな我々の潜在意識にあるうっすらとしたテロリズムへの好奇心こそ、動画を見るということによってしか振り落とされ浄化されず、あるいは急性ストレス障害や PTSD に陥ることによってしか自分自身に気づかれないものであるのかもしれない。

アメリカの原爆が「極めて緻密に計算されたアメリカの近代知性」によって「マゾヒズムの恍惚を要求しているわけではない広島・長崎市民」に投下されたものであるように、実は、ISISも、そして先ほどの質問を発する平和な我々日本国民自身も、本当は皆同じ穴の貉だと言えるのかもしれない。それがために、私の身震いも生じるのかもしれない。

■ 関連ページ・ブログ記事

(二〇一八年七月八日に追記：現在、これらは『全集』に収録。)

● コタール症候群

<http://iwasakijunichi.net/seishin/cotard.html>

● 解離性障害

<http://iwasakijunichi.net/seishin/kairi.html>

●女性の集団ヒステリーを考える

<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-ningengaku-blog/71190712.html>

●佐世保女子高生殺害事件についての私見 — 「人は、人になった  
ヒトである」ことをとらえ損ね続ける日本の「親切な」精神鑑定の  
現状(一)—

<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-ningengaku-blog/102240125.html>

●佐世保女子高生殺害事件についての私見 — 「人は、人になった  
ヒトである」ことをとらえ損ね続ける日本の「親切な」精神鑑定の  
現状(二)—

<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-ningengaku-blog/102240150.html>

●巫女・陰陽師と解離・離人・憑依などとの関係

<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-ningengaku-blog/78118363.html>

●現代の巫女と一般女性とに共通する潜在的古代的共感覚について  
<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-ningengaku-blog/46343132.html>

ml

●私の和歌人生史、平成日本における伝統和歌の現状(その一)  
<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/50386486.html>

●私の和歌人生史、平成日本における伝統和歌の現状(その二)  
<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/50713456.html>

●東日本大震災と宮沢賢治の自然観について(その一)  
<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/46752749.html>

●東日本大震災と宮沢賢治の自然観について(その二)  
<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/46935386.html>

●今後の日本史の教科書に書いてほしいこと「東北縄文時代から東  
日本大震災へ」

<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/47050302.html>

●「秋の夕暮」的退廃美に見る「大自然本位」の震災復興の鍵(そ  
の1)

<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/47210860.html>

●「秋の夕暮」的退廃美に見る「大自然本位」の震災復興の鍵(そ

611)

<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/47410388.html>

■画像出典

[http://en.wikipedia.org/wiki/Caligula\\_\(film\)](http://en.wikipedia.org/wiki/Caligula_(film))

[http://en.wikipedia.org/wiki/Salon\\_Kitty\\_\(film\)](http://en.wikipedia.org/wiki/Salon_Kitty_(film))